

小山 路夫(おやま・ろふ)

1、プロフィール

詩人。戦後、南津軽郡藤崎町の自宅(運送店)の二階に、「雪の社」を創設した。詩誌「雪」を主宰し、自身も優れた抒情詩を発表した。

<生没>

1923(大正 12)年6月 13 日～1990(平成2)年2月 16 日

<代表作>

抒情詩「私は歌を唄ひます」、「早春」(詩誌「雪」第 10 号)。

晩年に、歌集『雪』を発行。

<青森県との関わり>

南津軽郡藤崎町出身。東奥義塾を卒業後、東京で木箱の製造業を営む。妻の病により大鰐町の長女方に帰郷。

2、作家解説

おやまろふ、露西亞人の様な筆名。本名は小山光男である。小山は大正 12 年 6 月 13 日、南津軽郡藤崎町で父太一、母たけの四男(第七子)として出生。家業は駅前で林檎関係の運送店(㊦ 屋号)を営んでいた。弘前の東奥義塾を卒業後、町内の「(株)青森林檎加工」で林檎ジャムの製造に携わっていた。戦時色が濃くなっていく中で、次第に文芸に興味を抱くようになった。

敗戦後の混乱の最中、小山は運送店の二階に詩社「雪の社」を創設し、詩誌「雪」を主宰した。詩誌「雪」は、第 10 号まで発行されたらしい。他に、「一戸謙三詩抄」の刊行も手掛けた(『追憶帖』等の発刊)。当時、一戸は度々「雪の社」に、弘前から列車で足を運んでいる。どちらも、丁寧な手書きの字面が、多色刷り(孔版印刷、秋田県の阿仁合 北線社)で飾られている、「思わず詠んで見たくなる」、そんな素晴らしい詩誌である。その中から小山の一篇である。「私は歌を唄ひます。／ひとり寂しく遣瀬なく／涙に頬の濡れるとき／そつと想ひを繙いて／私は歌を唄ひます。／たとへリズムは合はずとも／やさしい歌を唄ひます。／　　／私は歌を

唄ひます。／ひとり悶える苦しさに／どうしてよいやら迷ふとき／そつと心を打ち開けて／私は歌を唄ひます。／たとへリズムに合はずとも／静かに歌を唄ひます。」
(詩誌「雪」第 10 号)

昭和 36 年に小山は、上京。埼玉県で事務職に就いた後、東京都葛飾区で「丸和木箱」と言う会社を経営し、木箱などを製造した。同 54 年に妻の病をきっかけに津軽に戻ることになり、長女(松岡路美子)の嫁ぎ先である南津軽郡大鰐町で 10 年余りを過したが、肺を患い体調は優れなかった。晩年、小山は歌集『雪』を発行した。(小山路夫、自費出版、同 61 年 8 月)225 首もの歌が詠まれている。その内の 3 首である。「病窓に盆踊の音しのび入り 意識もうすき妻と聞き居り／雪よ降れ雪よ降れ降れもつと降れ 浮世の愁え埋れるほどに／この冬もゲレンデのある町に住めど シュプールもかけず胸わるき我は」平成 2 年 2 月 16 日、多臓器不全により死去。享年 68 歳。松岡家の菩提寺である大鰐町大円寺の墓所に眠る。

3、資料紹介

○詩誌「雪」(第 10 号)

雑誌

1949(昭和 24)年 6 月 20 日

265mm × 185mm

戦後、藤崎町に「雪の社」を創設し、詩誌「雪」を主宰した。小山路夫(おやまろふ)の筆名で、自身も抒情詩を発表した。他に、「一戸謙三詩抄」(一冊目は『追憶帖』、二冊目は『茨の花』)の刊行も手掛けた。晩年には、大鰐町で歌集『雪』を発行した。